愛犬アニーの敵討ち

神奈川県　田宮　治

在りし日のアニー（右）

アニー、ごめんな

山梨県のいつもの橋に、その日は一人で六時に着いた。先日、山の上に逃れた大物を「いただき」と思いながら、「天気よし、準備よし」と心の中で繰り返し、放犬する。

ところが、今日は沢の奥へ狩り進むつもりなのに、ベテラン犬のミスとクマは先週獲った場所に一目散に飛んで行ったまま、いくら呼んでも戻って来ない。

橋の付近で五分ほど待っていると、二頭がやっと帰って来た。二頭を連れて五分も歩かないうちに、先に行った奈智とブル、アニー、ランの四頭が、もう止め鳴きである。方向を確認すると、一つ曲がったカーブの奥の小沢の八合目辺りである。

「しまった。戦力二頭がここにいる」

四頭といっても、一頭は追い犬の先犬で、アニーである。「たぶんあの大ジシだとすると……」と、不安がよぎる。小走りにカーブの先の小沢に向かう。着くのに五分くらいかかった。

さっきまでワンワン、ギャンギャン鳴いていたのに、静まり返って音一つしない。

「やっぱり飛ばれたか」と思っていると、上からアニーが元気なく、まるで悪いことして怒られたような様子で下りて来た。「アニー、どうした」と近寄るが、元気がまったくない。シシが出た直後は、パワフルにシシに挑むアニーだが、今まで一度もこんなアニーを見たことがない。

調べると、後ろ足の上部の背骨に沿って八センチくらい裂かれている。傷口が開いているが、出血はあまりしていない。「アニー、よしよし、大丈夫だ、頑張れ」と、今来た道を車に連れ帰った。わが家の犬たちはみな仲良しなので、シシを追うどころか、私の慌て方にただならないものを感じ、後から付いて来た。

三頭をひとまず車の箱に入れ、アニーに化膿止めを飲ませる。出血もとまったようだ。追って行った三頭のことが気になって仕方が

ない。「あいつらは百戦錬磨だから、むざむざとやられるものか」と自分に言い聞かせる。アニーの様子から大ジシに間違いない。やはり心配である。

気を取り直して、「よし、あそこを越えたのならば裏の大沢だ」と車で移動し、その大沢口に止めたのだが、鳴き声も無線もまったく入らない。大沢の奥だと判断し、クマとミスを連れ、大急ぎで大ジシが越えたはずの小沢を登り、止め鳴きの声がした八合目を目指す。だが、いつものやかましさは、どこにもない。

「おかしいなあ、近くにいればミスもクマもこんな動きではない。越えたのは、さっきの沢の奥の方向だったのかな」と思い、注意深く探しながら、小峰をいくつも越える。アニーのやられた沢の奥の小沢に下りるが、足跡一つない。

とうとう道に出た。二頭に引き綱を付け、道伝いに車を止めた所を目指す。車が見える所まで来ると、クマもミスも「放せ」と前足を立てて声まで出す。見ると、大ジシの跡が雪にくっきりと残っていた。所々に血まで落ちている。車を止めた奥ではなく、一番低い出峰まで峰伝いに逃げ、この大道に飛び降り、大道伝いにいくつもカーブした先で攻防していたのである。

既に三頭の犬が車の近くまでに戻っており、私たちを出迎えてくれる。近づくにつれて、ブルと奈智の首や顔が真っ赤なのに気付いた。まずクマとミスを車に乗せ、谷川で濡らしたタオルで二頭を拭きながら傷を調べる。何カ所も受傷しているが、大したことないようで、ほっとする。ランは無傷である。

「よし、よし、大丈夫だ。よくやったな、何時間も。よし、よし」と頭を撫で、一頭ずつ抱き上げて車に乗せた。私自身の見込み違いを悔い、犬たちに心から詫びた。

時計を見ると、十一時を指している。こんなに頑張ったのに空回りで、駆け付けてやれなかった自分が悔しい。残念で仕方ないけど、アニーのこともあるので、家路を急ぐことにする。

高速道路を使い、二時間三十分で家に着いた。妻と話をしながら一頭ずつ手当てをする。幸いにも命にかかわる傷ではなかったが、それでもアニーは十針ほど縫い、ブルも三カ所で十針ほど、奈智は七針であった。皆いい子で、私を信じて縫合させてくれる頑張り屋さんばかりである。化膿止めを飲ませ、その夜は車の犬箱で休ませることにした。狭い所のほうが糸を噛みきらないからだ。

明るいうちに全犬の手当てが終わった。驚異的な攻撃力を持つこの子たちが、これだけ受傷したのだから、きっと大物に違いない。単独猟は一歩間違った判断をすると、獲物を手にするどころか、犬の命も、時には自分の命さえも危険にさらしてしまう。あくまで注意深く、冷静であらねばならないと心に念じた。

アニーの死

翌朝、全犬を犬舎に戻し、食餌を与えた。思ったより皆元気である。アニーも元気で、肉の缶詰を中心に、ドッグフードと化膿止めの薬を一緒に混ぜたものを軽く与えると、喜んで食べた。「よし、大丈夫だ」。ひと安心である。

しかし、三時頃になってアニーは急に吐き出した。大きな息遣いである。いけない、内臓をやられていたか。大声で妻を呼び、「よしよし、すぐ医者に連れて行くから。アニー、頑張れ。必ず助けてやる」と震える手でアニーを抱き上げ、車に急いで乗せた。

妻の運転で途中まで行くと、アニーは私の腕の中で苦しそうに声を上げた。「ママ、止まれ！　わきに寄せろ」と車を止めさせた。アニーは悲しそうに私の顔を見上げ、甘えるような低い声で二度鳴いた後、息を引き取った。アニーは静かに目を閉じ、ついに手の届かない所に行ってしまった。眠るような死に顔である。悲しくて涙が落ちそうになる。頭の中を、アニーと駆け巡った山、数々の思い出がよみがえった。

アニー、苦しかったろう。昨日のうちに医者に診せておけば、こんなことにはならなかったのに。

残念で残念でならず、大声でアニーの名を呼び、心から詫びた。妻は一言も言わず、アニーの顔を何回も撫でている。しばらく茫然と、二人でただアニーを撫でていた。

アニーは私の大切な犬であり、しかも名犬だった。思えば、シシを初めて獲らせてくれたのも、クマを木揚げして撃たせてくれたのもアニーである。シシ犬の全国大会で二位と三位になった実力犬で、良い子をたくさん残してくれた。いま一軍で活躍中のシシ犬も、アニーが先犬で教えた犬たちだ。

「昨日はミスとクマの二頭が遅れたので、お前が真っ先に噛みに行ったのだろう」

後悔しても仕方ない。それでも、ああすればよかった、こうすればと、次から次へと頭をよぎる。目頭がジーンと熱くなった。もう一度、「アニー、ごめんな」と頭を撫でた。

「まだまだ活躍できたのに、私が悪かった。幸い、お前には子も孫もいる。お前そっくりの仔犬が産まれたら、きっとアニーと付けるからな」

どんなに名犬であっても、狩り方をひとつ間違えば死なせてしまう。そのとき悔やんでも遅いのである。これはと思える犬に育て上げることは、並大抵のことではない。「勝って兜の緒を締めよ」である。

思い返すと、私は少し天狗になっていた。先週もその前の週も、犬たちが完全にシシを止めてくれ、撃ったり刺したりして捕獲できたので、知らず知らずのうちに油断していたようだ。

ちょうど山の頂上に立って見渡す山並みのように、山の先は山、その先もまた山である。

シシ猟にも同じことが言える。どんなにうまく止めて獲らせてくれても、その時の場所も、シシの大小などの状況がまったく異なる。場合によっては、獲ったつもりでいても逃げられてしまうことさえある。ある意味では、それが狩猟であり、それも猟の楽しみなのかもしれない。要するに、極めたはずが、山並みと同じように、やはり極意など遠いのである。

私は、猟犬（シシ犬）として生まれたからには、大ジシと戦っての死は本望であると考えるようにしているし、終わったことは仕方のないことである。アニーもまた、私たち二人に見守られての最期は本望であったに違いない。

もとより大物猟は、「犬とシシとの真剣勝負」である。狩人は念には念を入れ、これに対処しなければならない。一歩間違えると悲しみのどん底に突き落とされ、立ち直りができないほどのダメージを受ける。

当たり前のことであるが、これらをすべてクリアした時に、狩人としての生きる力もわいてこよう。愛犬を負傷させたり死なせたりしないためにも、その瞬間に全力を尽くすことが肝要である。

敵討ち（リベンジ）

一週間過ぎた月曜日、アニーの敵討ちの日を迎えた。十分に作戦は練ってある。あえて土・日を外したのは、休日には必ず地元のハンターがその大沢に入るからである。

竜と奈智は咬み止めの大型犬で二頭そろえたかったが、奈智は傷が治っていないので外した。ブルは三カ所受傷していたが、幸いにも浅い。どうしてもこの犬は入れなければならない。結局、連れて行く犬は竜、ブル、クマ、ミス、ランの五頭に決めた。

大ジシはすぐ止まるが、止まってからが生死を懸けた勝負となる。そのため、どんな突進もかわせる百戦錬磨の犬たちでなければならない。犬の数が多いことは一見有利に思えるが、射撃の邪魔になることも考慮に入れるべきである。

少し雪があるが、風もなく天気は良い。慎重に猟具を身に付け、小峰が多い一番奥の林道に立った。下りようとする大峰が眼下に続き、遙か下の村の屋根が小さく見える。まるで一幅の絵のようだ。

ポケットからソーセージを取り出し、犬たちに一本ずつ与える。私もドリンク剤を一本飲む。一番

奥まで車で来たので、あまり時間は経っていない。まだ八時だ。

「よし、頼むぞ」と、祈るような気持ちで全犬を放した。今回は車に連絡係がいないので、すぐ追いかけられるように、大峰を歩いて狩り進む作戦である。

「シシは必ず、この大峰のどこかにいる」と自信をもってのことだが、なかなか出ない。小気味よく五頭は狩り進んでいる。「昨日、獲られたのかな」と思ったが、アニーのさくられた小沢の一つ手前、つまり一つ奥の小沢の反対側で鳴き出した。「やっぱりいたな。さて、どっちに行くか？」

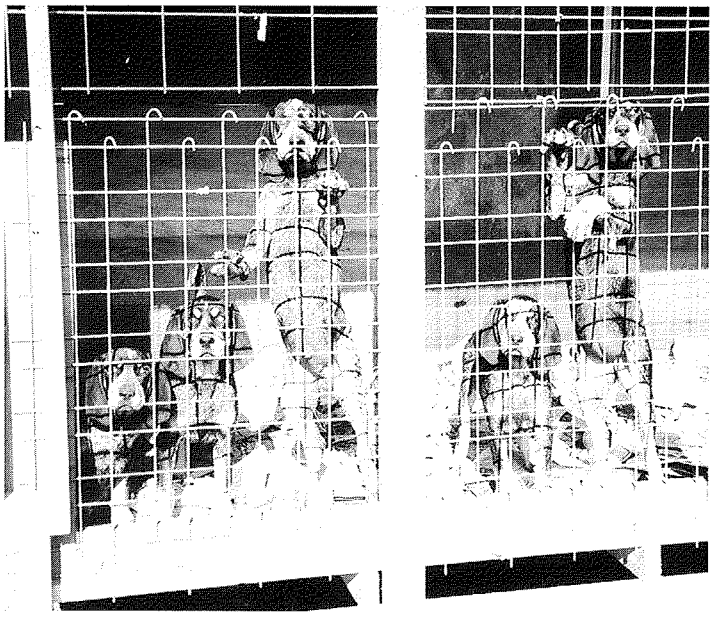
全犬の鳴き声が少し下った。「必ずこの沢に落とす」と銃を握り締め、転がるように後を追った。山が割れるような鳴き声で、一直線に谷へ下りて行く。

しばらくして、犬の鳴き声がまったく動かなくなった。「よし、止めた」。小峰伝いに近づいて行くと、ガッチリと止めている。うまいことに、シシの前方から近寄ることになるが、そこは沢底の広い所で、全犬が付いているようだ。ゆっくりと前方の平場を下り、三〇メートル離れた所に立った。シシは反対側の山の、五メートルくらい崩れた崖を背に、牙を鳴らして反撃している。犬は半円形に囲み、さかんに噛みを入れている。タテガミをピーンと立て、なかなかの動きのいい大ジシである。犬たちも突いては下り、また飛び出しては突き、実に見事なチームワークで攻撃を繰り返している。

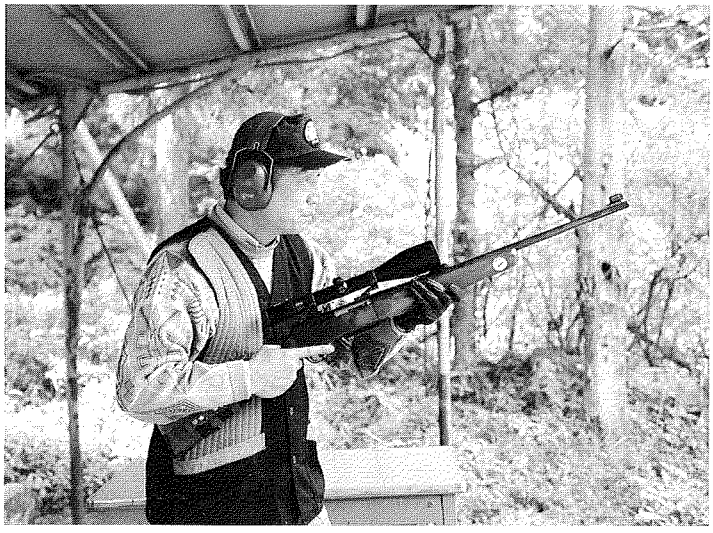
犬たちは私が近くに来たのに気付いたのか、鳴き声がさらに力強くなり、隙あらばとさかんに噛みを入れる。だが、そんな簡単に動けなくできる相手ではない。

「よし、早くやつけるぞ」と、そばの立ち木にそっと銃を依託し、一瞬のチャンスを待つ。胸が高鳴る最高の時間だ。少し撃ち下ろしとなるので、斜め前から首の付け根を狙うことにした。後ろの崖は土なので、なんの心配もいらない。

その時、ものすごい勢いで突進



出番を待つアニーの孫たち（平成15年７月生）



東京都猟友会の射撃大会で動的競技中の筆者

中古銃専門　買います　売ります
格安トラップ銃・スキート銃在庫豊富
（お問い合わせあり次第中古情報紙進呈）
コーチJK舎
電話　088（831）7775

犬たちとの攻防の末仕留めた125 Kgの荒ジシ
（ブローニング308、180グレーン）

してきたシシが悠然と戻り、クルリとこちらを向いた。犬は少し離れている。今だ！　静かにブローニング306の引き金を引く。ズドーンと心地よい響きが山々にこだました。犬たちがパッと広がった。シシは前足から崩れるように座り込んだ。

「やったぞ！　アニー、見たか。やったぞ！」と、一人大声で叫んだ。あれほど暴れ、犬たちを切りまくり、アニーの命まで奪ったシシを仕留めたというのに、不思議と冷静である。実にあっけない幕切れだった。

私はシシの三〇メートル以内には近寄らず、いつも少し高い所に立って撃つ。ツァイスを付けているので、このくらいの距離から撃つようにしている。犬たちにもこのほうがいいからである。また、シシが半矢で走っても、銃が自動なので、あと一発、悪くても二発は撃ちかけることができる。

今度も少し高い所に立つことができたので、一〇〇メートルくらい先まで見渡せる。銃を握り、「走ってみろ」としばらく立っていたが、シシは動かず、犬たちの好きなように噛まれていた。

「よしよし、よくやった」と近づくと、犬たちは「どうだジジ、俺が止めた」「いや、私が噛んだよ」と言いたげに、近寄って来た。一頭ずつ「よくやったな」「頑張ったな」と頭を撫でてやると、とても嬉しそうに尻尾を振って喜んでいる。

犬の知能は三、四歳児くらいと言われるけれど、この子たちは私が言うことがみな分かっているようで、私の宝物である。

獲ったから言うのではないが、今回は犬たちと自分の力だけでアニーの敵討ちがしたかった。その日は平日だったので孫には学校があり、喜びを分かち合えるのは犬たちだけである。いつものようにヘルメットを置いて記念の写真を撮った。「アニーよ、静かに眠れ」と心で呼び掛けながら。

道まで引き出すのは苦労であるが、すべてがうまくいったことで、ルンルン気分である。今回の一二五キロの荒ジシとの攻防で、負傷した犬はいなかった。今度ばかりは思い切り噛ませてやった。

会員のひろば

狩猟点描投稿歓迎

- 実猟体験記（成功談・失敗談），愛犬物語，猟犬の飼育・管理・訓練あれこれ，トライアル体験記，私のトライアル必勝法，愛銃物語，私の射撃上達法など，会員の皆様が日頃お考えになっておられることをどしどしご投稿下さい。
- 原稿枚数　400字詰10枚程度
- 応募先　全猟編集部
- 掲載分には規定の原稿料をお支払いいたします。

※なお，誌面の都合上掲載が遅延したり，不掲載となる場合がありますのでご了承下さい。